

サイクル 3 : リスク(Risk)

担当 : 卯田

今日の学習ポイント

- ・リスクとは何か？
- ・「科学リスク」と「認識リスク」の違いを理解する
- ・リスクの解釈モデルを提示してさまざまなケースを読み解く

次回の作業課題

- ・リスクを生産しよう！

【ウォームアップ】

日常生活において、皆さんが「身体に良いため」や「日々の生活をより良く生きるため」、「病気を治すため」に実践している行動、あるいは「リスクがある（と思う）のでやっていない行動」を列挙してください。

1. 分析概念“リスク(Risk)”の定義

■ リスクとは何か？

リスクとは、みなさんの専門に引きつけて言えば「健康に関わる未来の危険性」のことです。未来とは程度の差こそあれ不確実なもの。その未来になんらかの不利益を被る状況をリスクと言います。

リスクをこのように考えてみると、私たち（先生方？）の日常生活はリスクに満ち溢れていることになります。どこで仕入れたか分からない野菜や肉、油を使った安価な中華料理を提供する店で週三回昼飯を食べる、夕方に胃の中に何も入っていない状態でアルコール度数の高いお酒を一气飲みする、宴会で乾きものだけでビールを飲み続ける、一日数時間もパソコンのまえに座って論文を書くなど。どの行動も健康に良い行動とは決して言えません。こうした行動をリスク行動ともいいます。

ただ、こうしたリスク行動を私たち（先生方？）が普通に実行していることから分かるように、あるリスク行動に対して「止めておこう」や「まあ、仕方がない」、「まったく問題ない」といった考え方は個人やその社会によって大きく異なります。

一般的に、ある行為がリスクであるかどうかを判断する基準は大きく二つあります。ひとつは、データに基づいた確率や頻度のように数字で表すことができるものを根拠にする場合です。これを、ここでは「科学リスク（学術的にはエティック）」と呼びます。もう一つは、個人や先人の経験、地域社会の習慣、人びとの価値観を根拠にする場合です。これをここでは「認識リスク（学術的にはエミック）」と呼びます。もちろん、実際には、私たちはその時々状況に応じてさまざまな根拠を見比べてその行為にリスクがあるかどうかを判断しています。

■「科学リスク」と「認識リスク」による捉え方の違い

あるリスク行動に対する解釈が個人やその人が所属している文化によって異なると記しましたが、「科学リスク」と「認識リスク」という観点からみると具体的にどのように異なるのかを理解してみましょう。

例：ウガンダにおけるコンドームの利用、日本の MSM におけるコンドームの利用

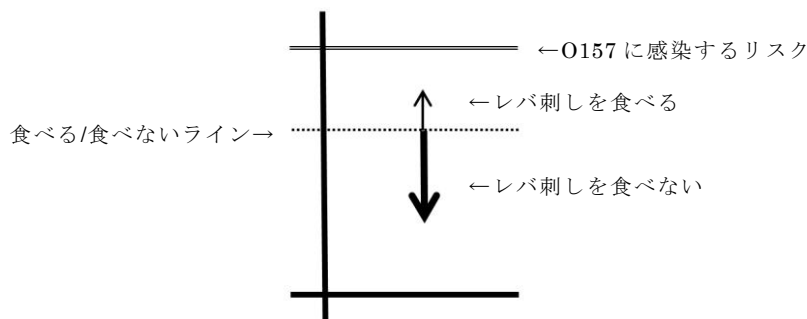
2. リスクの解釈モデルを提示してケースを読み解く

ひとことで「科学リスク」と「認識リスク」といってもいろいろあります。ここでは、いくつかの解釈モデルを使って具体的なケースを読み解いてみましょう。

- ① 「科学リスクに正確に対応したことで、実際にリスクが減少したケース」：『レバ刺し』モデル
- ② 「リスクの回避行動が、逆に新たなリスクを生み出したケース」：『9.11』モデル
- ③ 「科学リスクがない？のにリスク回避のケース」：『動物供養』モデル
- ④ 「リスクがあるから逆にそのリスクを選択するケース」：『本上まなみ』モデル

■「科学リスクに正確に対応したことで、実際にリスクが減少したケース」：『レバ刺し』モデル

- 科学リスク：生レバーから病原性大腸菌 O157 が検出されている。O157 に感染するリスク。
- リスク回避：厚労省の分科会は 2012 年 7 月 1 日からレバ刺し販売禁止を決定。
- 結果：O157 に感染するリスクは確実に減少



レバ刺しを食べない派（↑）

：「感染する確率がゼロでない以上、全面禁止はやむを得ない」

殺菌の手法が確立されていない。ゼロリスクを目指す。実際に食中毒が発生した。

レバ刺しを食べる派（↓）

：レバ刺しは食文化であり、消費者に選択を任せるべき。

国が規制する問題でない。自己責任。

リスクと付き合いながら食文化の多様性を維持していく。

■ 「リスクの回避行動が、逆に新たなリスクを生み出したケース」：『9.11』モデル

2001年9月11日、米国同時多発テロが起きました。WTCビルに一機目の飛行機が衝突した様子を多くのメディアが全世界に発信していたその時、二機目の飛行機が隣接のビルに衝突しました。この映像は各地でリアルタイムで放映され、膨大な人びとが目撃者となりました。

それから数カ月の間、アメリカ人を含め多くの国の人びとは飛行機に乗るのを止めました。搭乗した飛行機がテロリストにハイジャックされるのを恐れ、そのリスクを回避しようとしたのです。実際、テロ攻撃後に民間航空便の運航が再開しましたが、どの飛行機もガラガラだったそうです。この時期、アメリカ人の多くは飛行機の代わりに自家用車を使いました。

こうしたなか、米国のある教授が計算をしました。この計算によると、テロリストが一週間に一機の旅客機を米国内でハイジャックし墜落させた場合、一年間毎月一回飛行機を利用する人がハイジャックに遇って死ぬ確率は135,000分の1だそうです。一方、車に乗って死亡事故に遇う確率は6,000分の1だそうです。すなわち、テロを恐れて車に乗りかえ、交通事故で死亡するリスクは、テロに恐れながら飛行機に乗って実際にテロに遭う確率に比べて極めて高いのです。

この教授の指摘によると、米国人の飛行機から車への移行は一年間続いたそうです。そして、その間、飛行機から車に乗り換え、交通事故を起こして死亡した人の数は1595人だったそうです。この数字はアメリカだけのことです。あの「映像」をみた世界中の人たちのなかで、おそらく多くの人がある一定期間、飛行機から車に乗り換えて移動したことでしょう。それがいったいどのような結果になったのかは定かではありません。

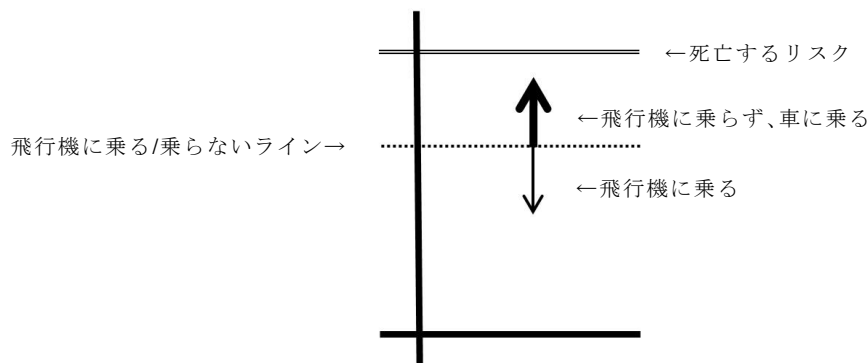
この現象は、リスク回避行動が逆に新たなリスク（これを対抗リスクと言います）を生み出す典型的なケースです。

科学リスク：それでも飛行機に乗る方が安全

認識リスク：搭乗した飛行機がテロリストにハイジャックされ墜落して死亡する（と思う）

→リスク回避行動：飛行機に乗らずに、車で移動する

→結果：車に乗り換えた人は、交通事故に遭い死亡する確率が増加した

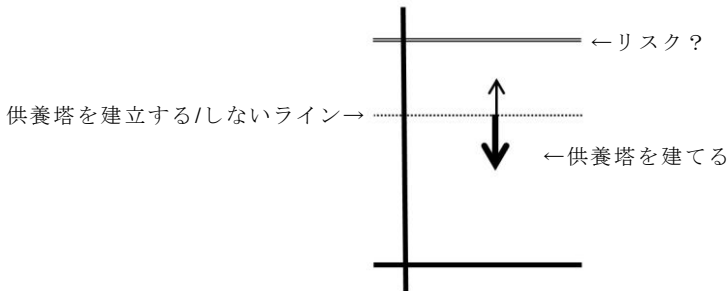


■ 「科学リスクがない？のにリスク回避のケース」：『動物供養』モデル

科学リスク：動物を殺してもなんら科学的なリスクはない。

認識リスク：うしろめたさ、社会の目が怖い、

→リスク回避行動：科学的価値観に立脚した研究者が実験動物の慰霊祭を開催
動物の霊を弔うことは精神衛生上良いのかもしれない。



実験動物の供養塔を立て慰霊祭を行う

■ 「リスクがあるから、逆にそのリスクを選択するケース」：『本上まなみ』モデル

○科学リスク：法律に従って慰謝料を請求される

○認識リスク：自分の妻が怖い。相手も旦那がいる。

一回ぐらいは大丈夫ではないか

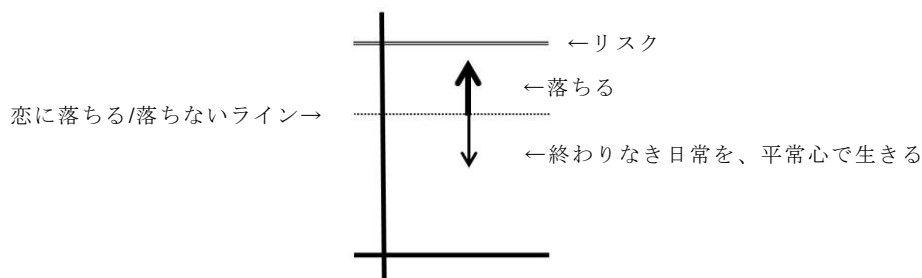
この場合のリスク：そこに障害（リスク）があるから盛り上がる？

リスクが動機になっている？

○タバコの味もろくにしない高校生が体育館の裏でタバコを吸ったり、
万引きするのもこのモデルか？



本上まなみさん



3、まとめ

人間がもつリスクの構造的な特徴

*社会や文化が異なれば、危険だと思ふ対象も異なる。リスクは社会的に構築されるもの。

*実際の「科学的リスク」は低いが、メディア等の情報により「認識リスク」を高めに設定してしまうこともある。

3、次回の作業課題

皆さんはスタートアップ（一獲千金を狙う新興企業）のビジネスマンです。

その中の人々がリスクを感じるにはビジネスチャンスもあります。そこで、人間がもつ認識リスクの構造的特徴を逆に利用し、巧みにリスクを生産してください。

そして、そのリスクを煽り、「あるかもしれない」状況をつくり出し、それに対処するための商品を開発して、その商品の販売戦略を練ってください。

- ① どのようなリスクなのか、②商品（ターゲットは誰か、価格、どのような効果があるのか）
- ③その商品を買う人たちの行動をアクターベースモデルで説明してください。

【評価】

発表を聞いている人がリスクの存在に恐れ、不安に打ちひしがれ、背筋が寒くなり、落ち込み、思わず購入してしまう商品を開発した班が優秀

【参考文献】

一ノ瀬正樹（2013）『放射能問題に立ち向かう哲学』筑摩書房

ダン・ガードナー（2009）『リスクにあなたは騙される-「恐怖」を操る論理』早川書房